

# イヌイットの暮らしを支える 〈ワモンアザラシ〉

地球温暖化の影響をもっともうけているのが北極海に棲む動物たちかもしれない。体を休め、繁殖する場を失ったのでは、アザラシもイヌイットともに救われない



捕獲したワモンアザラシ(写真はすべてケベック州アクリヴィック村)

現在のイヌイット文化は、紀元後一〇〇〇年ごろにアラスカの沿岸で発生し、極北地域全域にひろがった捕鯨を経済基盤とするチュール文化に由来する。

一七世紀ごろに寒冷化がピークに達し、ホッキョククジラの数が少なくなると、人びとは地元の陸獣や小型の海獣を食料資源とせざるをえなくなった。ほぼ一年中、捕獲できるワモンアザラシ(以下、アザラシと略称)は、そのなかでもっとも重要な食料資源のひとつであった。

## アザラシの捕獲と利用

現在のアザラシ猟には、夏から秋にかけての海上でボートを利用した捕獲や冬の海氷上に形成された呼吸穴を利用した捕獲、春の海氷上でうたた寝をしているアザラシの捕獲などがある。春や夏の狩猟は比較的容易だが、零下三〇度以下になる冬に呼吸穴にやってくるアザラシを何時間もじっと待ち続ける狩猟は、忍耐を必要とする。

## 世界観におけるアザラシとイヌイットの関係

アザラシの肉と脂肪はイヌイットの中心的な食料であるとともに、その毛皮は靴や手袋の素材となる。アザラシはみずからの意思で捕獲されるため、獲物を無駄にすることなく、ほかの人びとと分かち合いながら利用しなければならぬ。また、イヌイットは考えている。また、捕獲したのちにアザラシに真水を飲ませるなど儀礼をして、

アザラシを分配するハンター



アザラシの解体



岸上伸啓  
きしがみのぶひろ  
民博 先端人類科学研究部  
カナダ・イヌイットを中心に北方先住民文化の研究をはじめて三五年。現在はアラスカのイヌピアックの捕鯨文化を研究中。著書に『イヌイット』(中公新書)などがある。

## 現金収入源としての毛皮の取引

その魂をカミの世界に送りかえせば、その魂はアザラシの姿をとって同じハンターのもとに戻ってくる、と信じている。このように、イヌイットはアザラシを捕殺し、食べるが、そのアザラシを儀礼によって再生させるため、両者は互恵的な関係にある。

皮のあらたな加工技術が開発されたので、アザラシの毛皮は高級毛皮服の素材として取引されるようになった。定住生活をはじめ、現金を必要としていた当時のイヌイットにとって、石製彫刻や版画製作とともに、アザラシの毛皮の取引は貴重な収入源となった。とくにアザラシの肉と脂肪は分配しながら食べ、毛皮を売り、現金を得ることができた。その現金でガンリンやライフルの銃弾を購入し、ア

## アザラシをめぐる変化

アザラシ猟を続けたのである。ところが、一九八三年にヨーロッパ共同体が、動物愛護運動の影響を受けて、アザラシの輸出入を禁止したために、毛皮市場は崩壊してしまった。イヌイットはアザラシの毛皮の取引から現金を得ることができなくなり、ハンターは、かつてのようには狩猟に行くことができず、食料不足に陥ることもあった。

さらに一九八〇年代から温暖化のためにアザラシの生息域が狭くなって、総数が減少しつつある。しかも、イヌイットの若者のなかには、村外から輸送されてくる加工食品を好んで食べ、狩猟にあまり従事しない者も出現している。

このようにアザラシをめぐる状況は、この五〇年間で大きく変わった。今や、アザラシに多面的に依存していたイヌイットの生活は、急激に変化しつつある。

アザラシを食べる人びと。近所の人たちが集まり、捕獲したアザラシを食べているところ



冬のアザラシ猟。海氷上に形成された呼吸穴にやってくるアザラシを待つハンター。数時間待っても1頭も出現しないことがある



## ワモンアザラシ

*Phoca hispida* 英名 Ringed seal

新生児は白い産毛に覆われて真っ白だが、成長すると濃い灰色の背中中に明るい色の丸い模様をもつ。別名、フィリアザラシ。

北極海やベーリング海、オホーツク海に生息する哺乳類で、ホッキョククジラや甲殻類をおもな食料としている。オスは体長約125~150cm、体重65~95kgで、メスは体長約115~140cm、体重40~80kg。生息数は600万頭と推定。海洋汚染や温暖化の影響でその総数は減少しつつある。